



竹内宏 (たけうちひろし)

ジーアンドティー代表取締役。1961年生まれ。1980年にマツダオート大阪へ入社し、1984年に独立し保険代理店兼中古車販売業を営む傍ら、カーディテーリングに触れる。1987年に廃業し、テロソンコーポレーションのグループ会社にカーディテーリングの本部社員として入社。大手カー用品店にコーティングビジネスを提案し、自らも実験店で現場作業に従事する。その後自動車補修用品の営業経験を積み、2003年に再び独立してジーアンドティーを設立。サンマイド社サンドベーバーの東日本代理店として磨き関連商品を販売しながら、講習会を開催するなどアフターケアを重視した営業手法を展開している。



[第20回] ボデーコーティング剤の塗布・拭き上げは無駄なく、ムラなく、すき間なく

脱脂は中性シャンプーとシリコンオフで念入りに

前号では、硬化型ガラス系ボデーコーティング剤の施工手順を紹介しました。今回は、各工程での注意点と、コーティング剤の塗布や拭き上げ、納車までの流れについて説明します。

まずコーティング剤の塗布についてですが、硬化型ガラス系ボデーコーティング剤は薄膜塗料と言えますので、塗布前の下地処理に脱脂作業が必要になります。脱脂が不充分でもコーティングは硬化しますが、耐久性能が充分ではなかったり、ムラが発生する場合がありますので、手を抜いてはいけません。

脱脂は、基本的には中性シャンプーを水に薄めて施工面を洗い、水を切った後に溶剤系のシリコンオフなどで再度拭き上げます。アルカリとコーティング剤は相性が良くないため、中性シャンプーを使用するほうが無難です。シャンプー洗いの後はしっかり水を掛けて、洗剤が残らないようにしてください。

ここまで作業が終われば、いよいよコーティング剤の塗布です。ほとんどの場合は、スポンジに液剤を付けて塗り込みますが、スプレーガンで吹き付けるタイプもありますので、販売元

の推奨手順に沿って作業しましょう。

コーティング剤はすき間なく真っ直ぐ塗布する

一般的な塗り込みタイプの場合はコーティング剤を塗布しやすいよう、まず小分けボトルに移し替えることをお勧めします。2液と1液のタイプがありますが、2液のタイプは一度硬化剤を混ぜると使用時間が限られますので、気を付ける必要があります。1液タイプは、残ったら元の容器に戻しても大丈夫なものが多いため、成分によっては酸素や水分に触れると急激に反応するものもありますので、あらかじめよく確認してください。

塗布用のスポンジは、小ぶりで目の細かいものなら何でも良いのですが、厚みがあるとスポンジに液剤が吸われて無駄になるため、スポンジ部が薄いものか、仕上げ用クロスを巻き付けた

状態で使用すると効率良く塗布できます。

塗る際はまず、液剤をスポンジへ線状に適量付けます。全面に付けると液剤が無駄になります。パネルに塗る時は、あまり押さえつけず、一方向に真っすぐ延ばすように動かします。そして時々補充し、すき間ができるないように同じ動作を繰り返します。早く乾燥するものが多いため、一度に車両全体に塗らず、パネルごとに塗って拭き上げるようにします。メーカーごとに乾燥の速さが違いますので、事前に確認してください。

拭き上げはクロスを粗拭き用と仕上げ用とで使い分け「の」の字状に

拭き上げはワックスと同様に「の」の字を描きながら行います。クロスはあまり毛足が長くない、仕上げ用の目



ボデーコーティング剤は瓶などに入れられていることが多い、一度に大量に出しあまいやすいため、小分けボトルに移し替えるのが安全。またスポンジも、そのまま使用せず仕上げ用クロスを巻き付けたほうが、コーティング剤を吸収しそうで適度に染み出しあやすい状態で残るため使用量を節約できる

の細かいものが良いでしょう。最初に粗拭きを行い、余剰分を拭き取ります。ある程度光沢のムラがなくなったら、新しいクロスに変えて仕上げ拭きを行います。

なお、クロスは必ず、粗拭き用と仕上げ用とを使い分けるようにしてください。仕上げ用クロスに無駄に余剰分が付着するとなかなかスッキリ仕上がりません。特に黒系のボデーカラーはムラが目立ちやすいため、時間を掛けている間にムラがなくなるまで拭き上げます。作業するパネルの順番に決まりはありませんが、磨きの順番と同じにしておけば良いのではないですか。

また、カーオーナーの要望に応じて、エアロパーツやホイールなどにも塗布しますが、コーティング剤によってボデー以外の個所に対する効果が違いますので、事前に確認しておく必要があります。

作業が完了したら、後は納車を待つばかりです。ボデーコーティングの依頼を受けたとしても、室内清掃は納車時のイメージアップのためにもサービスで行うほうが良いでしょう。特にダッシュボード周りのホコリは、きれいにすれば喜んでもらえると思います。間違ってもコンパウンドの磨きカスを残さないように注意してください。

ほとんどのコーティング剤は、空気中の水分と反応して硬化が進み安定するまで24時間前後必要です。この間は、水滴が付かないよう屋内で保管する必要があります。水滴が付くと、その部分がシミになります。納車は、作業日の翌日以降に設定するようにあらかじめ説明しておいてください。

磨きにくい塗膜は無理せず ダブルorギアアクション ポリッシャーを使用

最後に、下地処理の際の注意点を追

コーティング剤を塗布する際は、仕上げ用クロスを巻き付けたスポンジにコーティング剤を線状に無駄なく染み込ませ、かつ塗りムラが発生しないよう往復させず同一方向に真っ直ぐすき間なく塗りおろす



記します。

第一に、粒子の粗いコンパウンドは使いません。新車のクリヤーは、車種にもよりますが補修塗膜より薄い場合が多いため、ツヤ感が変わらないよう、時間が掛かってもできるだけ細かい粒子で研磨しましょう。ダメージのある場所は、軽く3000番以上のサンドペーパーをかけて処理します。

第二に、バフが絡むなど磨きにくい塗膜の場合は、ダブルアクションやギアアクションなど偏心タイプのポリッシャーを使用したほうが作業性も仕上がりも良くなります。経験上、耐スリ傷性クリヤーの車両やホンダ車はバフ絡みが起きやすい傾向にあり、シングルアクションポリッシャーではスポンジバフを使ってもスリ傷が入ってしまいます。

その他の車種でも、原因は分かりませんが、焼きが甘い塗装を磨いているような感触が出る場合があります。

このような車両は、シングルアクシ

ョンポリッシャーだけでコーティングの下地を作ることは簡単ではありません。結論を言えば、コーティングの施工を引き受けるなら、ダブルアクションポリッシャーは必需品になりますので、お持ちでない工場は必ず常備してください。

問題のない車種でも、最終仕上げはシングルアクションポリッシャーよりも扱いやすさや研削力に違いがありますので、メーカー・塗料販売店などにしっかり説明してもらってから選択すると良いでしょう。

最後に気を付けてほしいことは、保険修理時の扱いです。私の認識では、いまだに請求額の判断基準は曖昧なところがあり、話し合いで決めるしかありません。はっきりしているのは、施工の記録がしっかりと残っていなければ減額されたり、支払いを拒否されたりする場合がある、ということです。



コーティング剤塗布後の拭き上げは、粗拭き用と仕上げ用とでクロスを分けて行うとムラが残りにくい